



創刊に寄せて

——社会事業講座担当二十五年間の思い出——

生 江 孝 之

口 述

私が、日本女子大学に新設された社会事業講座の講師として、其の交渉にあずかり、お受けしたのは大正七年で、其の当時は、成瀬先生も御存命中であったが、然し其の問題で直接お会いしたのは、当時の学監麻生先生であった事は云う迄もない。私は、其の講座を担当すべく御交渉に接した際には、身辺頗る多忙、且つ、それまで学校の講義を担当した経験がなかったので、任務の重大なるを痛感し、一時躊躇したが、熟慮の上、遂にお引受けしたのである。爾來昭和十九年に至る迄、満二十五年、学校の門をくぐったのであるが、年令から云えば五十才から七十五才に迄達するので、其の間に於ける思い出は、甚だ多いのである。

大正七年と云う年は、我が国の社会問題が、書齋より出でて街頭に進出した年であり、又其れが一時に爆發した年でもあったのである。第一次世界大戦が此の年を以て終りを告げたが、日本は連合国側であったのと、戦乱の中心からは頗る遠い有利な地位にあったので、軍隊の派遣よりも寧ろ、多くの船舶は勿論、多量の軍需品を高価で提供し得たのであつた。之が為、一方所謂成金族が続出して、富の分配が著しく不均衡になり、他方物価が暴騰して、遂に

米騒動の勃発を見るに至った。此の米騒動は、最初富山の一小漁村に起つたのであるが、恰も大河の一時に決壊するが如く、瞬く間に我が大、中都市に波及し、其の勢い極めて猛烈を極め、一時は警察力を以てしては最早如何ともなし難く、遂に已むなく、軍隊の出動を見るに至つた程であつた。

斯る状態に対し、政府や公共団体は勿論、富豪や成金に至るまで、非常な驚きと恐怖に襲われ、之が善後策として物価の低下をはかる為、全国主要都市に簡易市場、簡易食堂を普及せしむる等の、一時的処置をとつたが、之を契機として恒久的な施設の増設拡充に全力を尽すに至り、従来の慈善事業を踏み超えて社会事業へと進展するに至つたのである。然し其の際最大の難事は、「この新しい政策に基づく新しい施設の指導者の缺乏を如何にして充実し得るか」と云ふ事であつた。

それで私立大学、高専等に於ては、其の必要に應ずべく、之が養成機関を設けようとしたが、容易ではなかつた。其の中率先其の必要を充たすべく、決然として「社会事業講座」を新設したのは、漸く日本女子大学、日本大学及び其の他二、三校のみであつたと記憶して居る。

私は大正七年、日本女子大学、日本大学の双方に於て講義を担当した。女子大に於ては、選択課目とし、各学部からの希望者を以て組織したのであるが、学生の数は、四、五十人に達した。しかし、其の状態だけでは、客観的情勢に適応し得ない事を認めた女子大は、遂に大正十年「社会事業学部」を新設するに至つたのである。其れは、児童保全と女工保全に重きを置いたのであるが、其の基礎学として、多くの学科も含まれて居た事は云う迄もない。其の時の教授陣は「松本亦太郎、塩沢正貞、高橋誠一郎、永井潜、綿貫哲雄、戸田貞三、永井亨」等の諸氏であり、何れもそれぞれの学界に於ける「権威」であつた。これらの教授を以て組織されたと云ふ事は、当時の女子大の社会的信用が如何に偉大であつたかを明示するものと云いるのである。私も亦引きつづき、其の末席を汚がしたが、児童保全、女工保全、及び社会事業概論等で、一週六時間であつた。

私は、明治四十二年以来内務省地方局の囑託となり、外遊二回に於ける欧米社会事業の調査に基づき、自ら其の乏しきを知りつつも、我が国に於ける社会事業の啓蒙及び指導に、微力の限りを尽すべく多忙を極めて居た。

私が、斯る間に於て、日本女子大学の講座を担当したのであるが、最初の数年間は、当時社会事業に関する著書及び其の他の資料蒐集に困難であつた為、主として私の蒐集した資料に基づき、口述の講義のみであつた。しかし、其れでは自他共に、極めて不便なので、私の資料に基づき「社会事業綱要」を刊行した。

此の本は、他の学究的学者の其れの如く、理論も哲学もない単に平面的な記述にすぎなかつたものであるが、其れには、次の二つの理由がある。一つは、当時「社会事業」は、日本に於ては勿論外国に於ても、未だ「学」とする程の内容がなく、時代の必要に應じ進展するに過ぎず、従つて専攻的な学者も非常に乏しかつたので、私の小著も亦、其の域を出なかつたのである。もう一つの理由は、今日でも尙、これを告白するに躊躇するのであるが、私には生來の痼疾があつた。其れは「頭痛持ち」であつたのである。これは、生れて間もなく、後頭部に傷害をうけた結果であるが、之が生涯「私の茨の道」としてつきまとい、其れが為に、私は「自分の思索力」を活用し得ず、従つてまた、生涯書齋の人となり得なかつたのである。

しかし、小著刊行当時於て、私は既に外遊数回に及び、欧米と日本内部の社会事業の概況を實際に踏査して居た為、著書の八割は幸いにも自分で實際に踏査したものだと言ふ「特色」を持ち得たのである。兎に角、社会事業に関する著書の極めて乏しき際、不完全ながら「社会事業綱要」を著作する事が出来たのは、私が女子大で「社会事業講座」を担当した結果、其の必要に迫られた為であつた。此の事は、私が日本女子大学に対し、特に感謝せざるを得ないのである。

私は此の著書を使って講義をしたので、講義が単調に流れたと思つて、誠に申し訳なく思うが、時として教壇の上で、落涙禁じ難く、所謂声涙並び下りつつ講義をしたのは、自分の調査資料を通じての講義であつた為、其の調査當

時の感情が心底からこみあげて、さんとしておさえる術を知らなかった故である。之が私の講義の際に於ける特色の一つであったのであらう。

又、私は時々、講義中に仮眠状態に陥り、しばしば学生を顧がしたが、其れは「頭痛持ち」の爲、時としては多量の服薬を余儀なくされたので起つたのであった。之がまた他に類を見ざる特異性であつたと思ふのである。そしてこの痼疾は、今尙依然として私を悩ましつのである。

私が、教鞭をとつた長い年月の間には、数々の想い出がある。その一つは、日頃は遺憾ながら学生に多く接触する機会がなかつたが、然し卒論、就職の際には、幾度も親しく相語るを得た。それで私はこれらの学生方を今尙記憶して居るが、其の他は主として社会事業に従事して居る方々のみである。尙、卒論に対して一言したいのは、私自身が非常に啓発され示唆を受ける事が多かつたことである。私は、前述の講座のみを担当して居たのであつたが、学生は他の専門教授からの講義を織り込んで卒論を書く為に、素晴らしいものを書き得たのだと思ふ。女子大の学生程、卒論に力を尽す学生は他に多くの例を見ないと思われ、深い感銘にうたれる事が多かつた。

然し先生と学生との間には、より多く語り合う機会を得なかつた事を、今尙遺憾に堪えぬ思いがする。又、軽井沢の夏期修養会に於て、私は毎夏一週間は平素の生活を離れ大自然に接しつつ、学生と語り歛棄を共にする機会を与えられたが、其の折の人格的交流が今も尙、感慨極めて深く、禁じ難い想い出の一つとして、胸底深く秘められて居る。

更に又、謝恩会の事であるが、之は学部だけのものと学校全体のものがあつた。卒業生が何れも喜々として、感謝にみちた面持でそれぞれの役を演ずるのであるが、先生方も其れに対し、将来を祝するための感話を述べるのであつた。此の謝恩会の折には、綿貫氏と私とが、社会事業学部の教授の中で感話を陳べる習慣があつたが、斯る際に於ける卒業生達の歓呼と哄笑との連結が、極めて印象深い想い出の一つである。

又、私が地方出張の際、各地で直接社会福祉事業に従事しつつある幾人かの卒業生に面会し、又それ等の人々と一堂に会して往時を追想しつつ談笑する折なども亦、最も楽しい思い出の一つである。殊に台湾、満洲及び中国に出張せる際の如き、私のためにわざわざ歓迎会を催し、社会事業学部卒業生をもその中に加えて、共に喜んで心行くまで語り合う事の如き、香ぐわしき記憶であり、そして之は桜楓会員の厚意に依るものであるが、高き教養を受けた桜楓会の会員達が、何れもその地方の文化昂揚に大きな貢献をなしつつあるに想いを致せば、桜楓会の強靱な結束力と真剣な努力に対しては、深く敬意を表せざるを得ない。

私が職を日本女子大学に奉ずる二十有五年、往時を追想して、感極めて深い。老来視力の減退と共に、日に老境の身に迫りつつあるを覚ゆる。従って自ら筆を執って思うが儘に感想を綴る事が至難なので、已むなく断片的ながら、重複をも省みず想い出の一端を述べたに過ぎぬ。しかし連綿として尽きぬ往年の思い出は、八十七才の老翁を若返らせる大きな潜在力であるを思うて、歓喜と感謝の念わいて禁じ難きものがある。

最後に一言したいのは、「社会福祉学科」に関する問題である。日本女子大学は社会事業学部や現在の社会福祉学科を通じ、我が国斯業の進展に対し、先駆的に又開發的に大きな役割を演じて来た事は周知の事実と認め得る。然し千古未曾有の社会的大変革に直面した終戦後の我が国は、其の再建途上に於て大小幾多の諸問題が勃発したが、就中、社会問題、社会政策、社会事業等が新しい陣容を整え、社会的に重要な位置を占むるに至った。政治家や学者や又一般社会大衆に於ても、競うて社会保障制度の整備拡充に対し、鋭意敢闘しつつあるの如き、その一証となすべきである。従って、此等の社会的趨勢に対応すべく終戦後、東京、大阪及び中京（名古屋）地方に社会事業短期大学を新設し、更に新旧諸大学に於ては、或いは社会学部を設け又旧設の社会事業学部を拡充して、時代の要請に応ずべく一意邁進するの跡歴然たるを認め得るのである。斯る際に於て、日本女子大学に於ては従来の先駆的開發的の伝統

卒業生の動向

現在の社会福祉学科は大正十四年に始めて二十二回生を卒業生として送り出して以来、新制三回生までの約三十年間千余人の卒業生を出している。

その当時の社会情勢に従って、設置当時の社会事業学部は家政学部第三類、家政学部管理科を経て今日の家政学部社会福祉学科となった。その間の卒業生の数が増減していることは国情と密接な関係があると思われる。特に終戦後は社会福祉の観念が高まり、一般に関心が深まって求た事が本学科志望者の増加にうかがわれるのである。

本学科の卒業生の動向を見ると、三、四年は就職する傾向が強い。その職業分野は社会事業関係や教育関係を始め、公務、会社、ジャーナリズム、研究所等に亘っている。終戦後は卒業生の就職する率が多い。

卒業生の就職状況 昭和28年12月現在

職 業 別	同 生 別 社会事業学 部 (22~33)	家政学部 才三類 (34~44)	家政学部管理 科 計費統計科 (45~48)	新制大学家政学部 社会福祉学科			合 計
				(1)	(2)	(3)	
社会事業関係	8	6	3	5	6	7	35
教 育	1	6	6	2	4	1	20
教育関係事務	3	2	3	2	5	0	15
社 会 教 育	5	0	0	0	2	0	7
公 務	5	2	5	0	0	0	12
労働	2	0	0	1	1	0	4
司法その他	1	0	1	0	2	0	4
会 社	1	0	0	2	2	0	5
株 主	0	0	2	5	7	9	23
パート	0	0	1	2	1	2	6
サーヴィス業	1	0	0	0	1	0	2
グリーナム	0	0	0	0	0	1	1
新送	0	0	3	1	3	2	9
試験	0	0	0	2	0	1	3
研 究 所	1	0	3	0	1	3	8

社会事業関係……児童相談所 保育所
 養護院 少年院
 厚生省児童局 都民生局 児童課
 教育関係事務……学校職員 寮大学生部輔導課
 日本育英会 大学学生部
 社会教育……Y W C A Y M C A
 労働……労働省 少年局
 労働基準署
 司法……家庭裁判所 刑務所

的精神を基盤とし、社会福祉学科の組織を变革し其の内容を拡充し、此等の諸大学と相提携し協力し、我が国文化国家建設の一翼として其の使命を達成のため、一段の検討を要すべきではなからうか。老人は過去を語るの常規を越脱し老婆心と知りつつも、一言之に及んだ老生の微衷御寛恕を得ば、幸甚の至りに堪えぬ次第である。